

関西大学人間健康学部における体験型教育の展開 —— 体験学習のフィールドとしての地域連携事業の可能性 ——

第1報 2010年度～2013年度

安田 忠典

抄録

2010年に開設された関西大学人間健康学部では、体験学習を重視してきた。本学部は、本格的なプロジェクトアドベンチャー施設を備え、少人数のグループでの体験学習を基礎トレーニングとして実施してきた。そして、経験者向けの体験学習のフィールドとして地域連携活動の場を開拓してきた。それらうちの成功例として、キャンパス所在地である堺市とその友好都市である田辺市で体験学習を展開してきた経緯を概括する。

キーワード：体験学習、地域連携、プロジェクトアドベンチャー

I. はじめに

2010年、堺市の南海高野線浅香山駅前に開設された関西大学人間健康学部は、文学部総合人文学科身体運動文化専修をその基盤の一つとしている。身体運動文化専修では、近代社会が抱える様々な矛盾や課題の背後に知性を貴ぶ一方で身体を蔑んできた近代教育そのものがあることを指摘し、身体をとおした教育である「体育」の可能性を追求すべく「付加価値追求型授業」「生涯スポーツ研究ステーション計画」などの実践に重きを置いた独自の教育・研究を進めてきていた(安田2015)。この実践的な「身体運動文化」路線は、人間健康学部の教育理念の中にも活かされている。

人間健康学部は、学理と実際との調和、学技一体を理念とした本学の学是である「学の実化」に基づき、単なる理論知識の蓄積に偏重することなく、実際の社会とのつながりを密にした人材養成教育を推進する。つまり、人間が幸福かつ豊かに生活できるよう、健康の維持や増進を図るために人間の健康に関わる基礎理論と実践的なアプローチを学び、それを基盤として地域コミュニティにおいて健康支援や生活支援の実践にたずさわることができる人材、すなわち人

間の健康に関する総合的な専門性を持つ人材を育成することを目的としている。

(http://www.kansai-u.ac.jp/past/data/academics/diploma_policy.html#f_08)

本稿は、体験学習と地域連携事業のディレクターのような立場にある筆者の視点で、人間健康学部において実践的「身体運動文化」路線が独自の体験学習のフレームワークへと展開していく過程のうちの前半4年間、すなわち完成年度を終えるまでを概括するものである。

II. プロジェクト・アドベンチャーの導入

人間健康学部は、2008年に策定された関西大学の長期ビジョンに沿って『『考動力』あふれる人材の育成拠点』となるべく、自ら考え、自律的かつ積極的に行動する学生を育成するために、スポーツ・福祉の分野で開発されてきた先進的な試みを採用し、学部独自の新たな体験型教育のあり方を模索してきた。

その中心となってきたのが堺キャンパスのシンボルの存在であるプロジェクト・アドベンチャー(以下PA)施設である。PAは、野外教育の一つとして米国で開発されたものであるが、人間の成長は信頼関係と気づきによって促進されるという人間観に基

づき、グループでの冒険的な体験を積んでいくという手法である。この種の体験学習法のねらいは、「体験」を単なる「体験」に終わらせるのではなく、「体験」(Concrete Experience)「省察」(Reflective Observation)「概念化」(Abstract Conceptualization)「実践」(Active Experimentation)という具体的、実践的な段階を丁寧に踏むことによって (Kolb 1984)、体験した事象を内面化し、自己変容へと結びつけることにある。

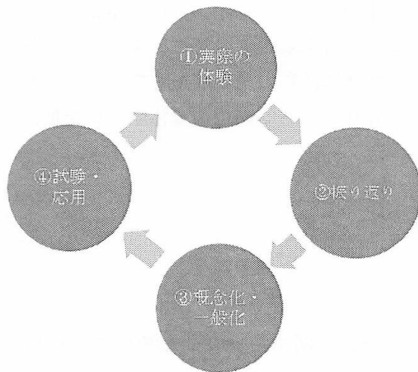


図1 体験学習のサイクル (D. Kolb 1984)

ところが体験学習は、デューイによって戦後日本の教育現場に一時期大きな影響力をもっていたが、それらの試みは今や「這い回る経験主義」と揶揄され環境教育など一部の領域でのみ実践されるに留まっている (中原 2013)。その原因については、内省を欠いた経験至上主義や、大半の体験学習法が専門化、技術化、マニュアル化に陥ってきたことがあげられよう。

そうした自己矛盾的な傾向はPAも例外ではなく、一定の目的の下に考案されたアイスブレイキングやコミュニケーションワークなどによる仮想的な体験や、専用施設のなかだけでの閉ざされたサイクルに留まりがちであるという欠点を抱えていた。しかし、「フルバリュー・コントラクト」「チャレンジ・バイ・チョイス」などのシンプルな理論で構成されたその体系は、後に述べるようなアレンジを加えることで、コミュニティづくりの実践的トレーニングとして有効であろうとの判断から、14基の「エレメント」と呼ばれるPA専用施設が堺キャンパスに設置された。

これらの施設群は「体験学習エリア」という名称で管理され、施設の施工を担当したPAJ (Project

Adventure Japan) が指定する指導者研修を受けた教職員が学生への紹介を担当した。そして体験学習エリアの施設群は、人間健康学部の1期生が3年次配当科目である専門演習、いわゆるゼミの活動を開始した2012年度よりフル稼働しはじめる。PAのオーソドックスなシークエンスに従って、体験学習ゼミに所属した20名の学生たちは様々なアイスブレイキングやコミュニケーションワークにチャレンジしていった。実際に本格的なトレーニングが開始されたのは同年4月14日(土)15日(日)。人間健康学部では土曜日は補講日として授業を配置していなかったため、週末の2日間は絶好の機会であった。それからは、毎週のようにPAによるトレーニングを実施し、学生たちはハイエレメントと呼ばれる高所でのロープを使った活動を、自分たちで安全管理をしながら実施できるレベルまで経験を積んだ。

(1) 能力を高めない学び

PAの利点は、非常にシンプルな哲学を持っているという点である。それゆえに、PAはどのような目的であっても相当柔軟に対応できる。逆に言えば、使い方によっては、有益にも有害にもなり得る。そこで、ゼミでのPA導入に際して強調したのが「フルバリュー・コントラクト」という理念であった。ここでいうコントラクトとは、グループで活動する際のもっとも基本的な約束のことで、PAの場合は「フルバリュー (Full value)」すなわち、すべての参加者の価値を尊重しあおうという約束を掲げている。

しかし、現実には自分自身も含めた全ての参加者の価値を受け入れ、認めあうのは簡単ではない。それは、コントラクト (契約) というよりは目指すべき目標のようなものではないか。そこで筆者は、学生たちに繰り返し次のような言葉を投げかけた。

「フルバリューという考え方は、これからアドベンチャーをやりましょうという時のコントラクト (約束ごと)、つまり前提みたいなものだけれど、じつは活動の最終目標でもあるのかもしれないですね。いや、ちょっと大きさに言うなら、互いを尊重しあうということは、人類の究極の目標かもしれません。本当にそんな社会がつけられるとしたら、そこでは差別や戦争は起こらな

いはずだ。逆に言うと、ぼくらは完全なフルバリューに達することは、永遠にできないのかもしれない。でも、それは目指すべきわかりやすい目標にはなるよね。」

このような、プログラムの根幹にかかわるようなアレンジを通して、本学部での体験学習プログラムは従来のPAとは若干ではあるが理念を異にしていくなくなる。もちろん、PAとて用いる人や状況によってさまざまに変化するものであり、広い意味でPAの持つ哲学自体を否定するものではない。むしろ、それをより鮮明化するのが意図でもある。つまりここでは「フルバリュー」すなわち「すべての人の価値を受け入れ尊重しあおう」という「約束」を、ともに活動する仲間の中で「目標」として共有することで、それ以外のさまざまな規範や技法から「浮かび上がらせる」ことを狙ったのである。

「フルバリュー」を目標としたのは、特定の技術や知識が体系された「技法」に何らかの名称を付与することで起こりがちな、その理念や方法論の固定化や権威化を避けたいからである。例えばPAなら、活動を通してメンバーでフラットな議論を進め、自らゴールセッティングを行い、そこへ至るプロセスを設計し、試行し、省察を加え、再度試行し…、という「体験学習のサイクル」を重視する。しかしこのサイクルを強調しすぎると、そうした経験を通して「(仕事が) できる人間になる」ことが目的であるかのような錯覚を参加者が抱いてしまう危険性が増す。とくに、身体活動の比重が大きいPAのような技法では「できる、できない」が目に見えやすい。確かに、冒険的な課題をクリアした時の達成感は素晴らしい。だが、それはすなわち「成果」に目を奪われやすいというリスクが高いことの裏返しでもある。当然のことであるが、体験学習がある種の人間の能力を高める活動である限り、その目指される能力の優劣という評価基準が生まれる。評価されることを前提にした活動となれば「評価の高い人」から順に階層化、権威化が生じ、「評価の高い人々」による管理や統制が進み、その体系化され命名された「技法」の頂点に君臨する層（あるいは個人）が形成される。そして、それが高じれば当然「フルバリュー」とは相いれないものとなる。

つまり、筆者らは客観的に評価しえない「フルバリュー」を目標として掲げることで、人間健康学部での体験学習が「ある種の人間の能力を高める活動」ではないことを意識化し、共有しようとしているのである。ならば、能力向上を目指さないという近代教育に背を向けるかのようなこの方針は、いったい何を指すのか。一言でいえば「いかに生きるかという個々の哲学を鍛え合う」ということである。語感からもうかがえたとおり、この着想は日本で育まれてきた武芸などの修行観に大きな影響を受けている。到達しえない目標を掲げ、生涯を通して磨き、学び続けるという東洋的な修行観を、西洋的な近代教育に活かせるのか。かような挑戦をも内包したうえで、2012年度より開始された体験学習ゼミでは、とくに前半のチームビルディングを中心にPAを導入していった。

(2) 評価をしない学び

「フルバリュー」を目標に掲げたPA等の活動を通して、ゼミの1期生たちは濃密な関係を構築していった。これは、PAでいうところの3つのゾーンのうちのC (Comfort) ゾーンを構築していったということである。各々に居場所がある心地のよい (Comfort) な場はしかし、居心地のよさゆえにそこに留まるならば成長や自己変容は期待できない。ある程度のストレスやリスクを覚悟したうえでCゾーンを踏み出してその外側に出たときに、成長や気づき、自己変容へと人は開かれてゆく。このCゾーンの外側がS (Stretch) ゾーンである。重要なのは、居場所があり、支援してもらえることを確信できる環境であれば、私たちはSゾーンへと踏み出せるということである。筆者らが、チームビルディングの基本を、遊んでいるだけのように見えるCゾーンの構築に置くこと理由はここにある。

もう一つ、これまでの経験から得た知見として、「評価をしない」ということがある。これは、そもそも「評価」できないものは「能力」とは言えないということで前述の「能力を高めるのではない」という姿勢とも密接に関連しているのだが、とくにこうした体験学習に取り組む最初の段階、すなわちチームビルディング、Cゾーンの構築に際して重要な規範となり得る。他者、つまり絶対的な評価権限を持

つ教師や上司はもちろん、同じ参加者らも含めた自分以外の誰かに「評価される心配がない」という環境を保証することで、参加者は素直に自分自身の思いや欲求を表現しやすくなる。そのような、ありのままの自分を受け入れてもらえる関係をつくるのがCゾーンの構築ということなのである。失敗しても、意気地がなくても、自分のすべてを受け入れてもらえるという安心感こそが、Sゾーンへ踏み出す背中を押してくれる。そんな生ぬるい関係で本当の成長など起こりえないという見方もあるが、受け入れてもらえる確信がない仲間に対して厳しい意見を述べるのは破壊行為に近い。本質的な議論にも、あるいは勇気のある挑戦にも、互いを尊重しあえる「フルバリュー」な関係は欠かせないのである。

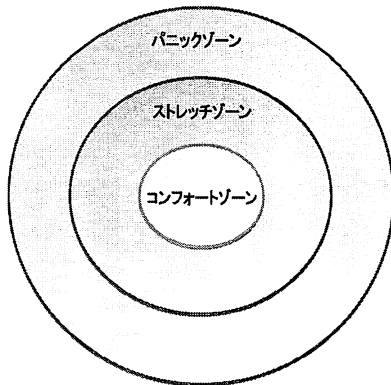


図2 体験学習の3つのゾーン (Brown 2008)

また、ここでの「評価」とは否定的な評価だけではない。例えば、他者より高い評価を得たいという欲求もまたその人の言動に影響する。むしろ、厳密には評価を完全に排除することは不可能であるが、可能な限りそうした評価を遠ざけることを互いに意識する機会や場を設定し、体験を繰り返すことが大切である。不安の小さい環境で、ゆっくり自分自身や仲間たちのことに意識を注ぐ。それはあたかも自動車のギアのニュートラルポジションのように、前にでも後ろにでも動けるという状態を確かめる機会である。他者の目を気にせず、すべては自身の意思で決定できるということが確かめられたときに、Sゾーンへ踏み出す準備ができたという状態なのである。

「評価をしない」という発想は、高橋和子の「からだ気づき」を通して得られた気づきをもとになって

いる。「からだ気づき」では、身体が本来持っている受動性に着目し、評価や操作をできるだけ遠ざけ、様々なボディワークを通してそれぞれの気づき（アウェアネス）が「やってくる」のを待つ。「からだ気づき」における評価や操作を遠ざけるといふかかわり方は、繰り返すが完全に遂行することはできないながら、非常にわかりやすく意図を伝えることができる。それはつまり「～力が高まる」とか「できるようになる」といった「有用性の原理」からの離脱であり、その人が生きている「いまここ」への回帰である。(高橋 2005)

「いかに生きるか」という哲学を鍛えるには「いまここ」で生きているという実感を持てる必要がある。ノルマに追われたり、評価されるといふ圧迫を感じたり、指示命令への服従を強いられたりという環境からいったん離脱することで、素直にどうしたいかを表現し、行動することができるようになる。「学び」と呼ばれるような自己変容は、こうした過程を抜きには起こりえないのである。

III. 大和川水辺の楽校への参画

1. 「子どもの水辺」事業

2003年、地域の身近な水辺における環境学習や自然体験活動を推進するため、国土交通省、文部科学省、環境省の三省が連携して『「子どもの水辺」再発見プロジェクト』を立ち上げた。高度経済成長期以来、河川などの身近な水辺は、危険であったり汚かったりといった理由で人々の生活から遠のく一方であった。そこで、水辺環境の改善や水辺での体験学習プログラムを充実させ、子どもたちを水辺に呼び戻そうというのが「子どもの水辺」プロジェクトの主旨であった。前年には、学校週5日制が施行され、ゆとり教育のコンテンツとして環境学習や体験学習が脚光を浴びはじめていた。「子どもの水辺」は瞬く間に全国に広がり、300近い河川がその指定を受け、補助金を得て事業を推進していった。

三省が連携したこのビッグプロジェクトのうち、国交省が管轄する「水辺の楽校」はハード面、すなわち子どもたちが安全に水辺に近づくための環境整備などを支援する事業であるが、プログラムのフィールドとなる河川公園などの整備事業がこれに当たるため、事業全体を「水辺の楽校」と呼称してい

る地域が少なくない。「大和川水辺の楽校」も、大阪府では唯一となる「子どもの水辺」プログラムとして2006年11月に登録されたものである。

2. 大和川水辺の楽校

「大和川…」の場合は、ちょうどその頃、阪神高速道路大和川線や大和川スーパー堤防の建設へ向けた動きが活発化していたため、大和川を浄化し、市民の憩いや学びの場へと整備することが急務となっていたという絶妙の好機を得ての立ち上げであった。このため、「大和川…」では、当初から阪神高速大和川線の沿線となる予定の堺市自治連合会七校区（三宝・錦西・錦綾・浅香山・東浅香山・新浅香山・五箇荘東）で組織された大和川線沿線連絡協議会（沿連協）をはじめとした市民の参画が顕著であった。さらに、2006年には堺市が政令指定都市へと移行したことも追い風となり、「大和川…」は「水辺の楽校まつり」や「一日水辺の楽校」などのきわめて充実したイベントを開催していくことができた。

ところが、2009年をもって国交省からの「水辺の楽校」への補助金が、満期ということで打ち切れ、大和川…」の事業は縮小か消滅かの岐路に立たされてしまった。国交省の補助金は、各地の「水辺の楽校」が一定期間内に自主的に事業運営できるようにするためのものであるから、「大和川…」も事業を継続するならば、自主運営しか選択肢はなかった。

このとき、「大和側…」では、当初から市民の参画を得ていたことが強みとなった。それまで複雑であった運営組織を、沿連協（市民）、水辺の楽校協議会（市民）、教育委員会（堺市）、河川水路課（堺市）、大和川河川事務所（国交省）という5つに絞り、ボランティアを軸に低コストで運営する方途を模索したのである。

3. 市民活動への本格的参画

そのようなタイミングで堺キャンパスに人間健康学部が開設され、我が国の環境運動の先駆者として知られる南方熊楠の研究に従事し、文学部で「野外活動実習」「エコツーリズム」などの授業を担当してきた筆者が「水辺の楽校協議会」の一員として参画する運びとなった。

さて、岐路に立った「大和川…」を継続すること

は、ある意味では堺市を挙げての挑戦となった。事務局機能も予算も、国や堺市に委ねるわけにはいかない。一方で、あくまでも市民の活動としての支援やサービスならば、公平に受けることができる。しばらくの間、「大和川…」の会議には、堺市役所の様々な部署の職員が出席した。市としても、特定の部署が丸抱えするのではないかたちで、なんとか「大和川…」を継続したいという思いが強かったのだろう。

具体的な関西大学の「大和川…」への参画は、2011年7月23日（土）に開催された「水辺の楽校まつり2011」である。まだ2回生までしか揃っていなかったこの年は、全学生に対してボランティアを募集し学部の専門性を活かした「ビーチゲームス」（ビーチフラッグ、水上輪投げなど）の体験コーナーを出展した。当日は8名のボランティア学生と教職員3名でコーナーを運営、好評を博した。

そして、移行期の混乱がようやく落ち着きつつあった2012年度、専門演習すなわち体験学習ゼミ1期生が始動、ただちに「大和川…」のメインプログラムとなる「水辺の楽校まつり」に学生が参加した。学部の専門科目を通して水上安全法や各種レクリエーション、ニュースポーツ、運動遊びなどを修得した学生たちは、まさに「学の実化」のフィールドとして地域での活動の現場を与えられ、自分たちの力を存分に試すことができるようになっていったのである。

当初、学生たちは得意の分野ということで実際の水辺の活動にだけ参加していたのだが、年に8-9回ほど開かれていた運営組織である水辺の楽校協議会の会議にオブザーバーとして参加させていただくようになる。以下に学生たちのレポートを引いておく。

会議がはじまったようなのだが、私たちには、いつからか会議だったのか、よくわからなかった。いや、会議という言葉はどうしても当てはまらなかった。なぜなら、みんな口ぐちにしゃべっているようにしか見えないうち、学生のコンパみみたいに勝手に話しこんでいる人たちもいる有様なのだ。決して私たちに気を使って雰囲気や和らげてくれたわけではなくて、いつもこんな調子らしい。私たちは気づかぬうちに、こんな感じでいいのかなあと、居心地がよくなって

表1 2012年度～2014年度の大和川水辺の楽校の主な事業

2012年

5月6日(日)	浅香山つつじまつり&大和川水辺の楽校	安全講習、水質調査、生物採集 模擬店、ステージ他
8月19日(日)	大和川水辺の楽校「子ども教室」	市立堺高校にて、ペットボトル顕微鏡づくり、川の生物観察、水を浄化する貝の実験
9月22日(日)	大和川水辺の楽校(公募)	水質調査、生物観察
10月25日(木)	出前講義(英彰小学校4年生)	出前講義
10月31日(木)	大和川水辺の楽校(錦陵小学校4年生)	水質調査、生物観察

2013年

5月6日(木)	大和川水辺の楽校まつり 浅香山つつじまつりと同時開催	安全講習、水質調査、生物採集 模擬店、ステージ他
8月10日(土)	大和川水辺の楽校「子ども教室」	市立堺高校にて、あし笛づくり、大和川の生きものや河原の虫の観察
10月6日(木)	大和川水辺の楽校(公募)	水質調査、生物観察

2014年

5月6日(木)	大和川水辺の楽校まつり 浅香山つつじまつりと同時開催	安全講習、水質調査、生物採集 模擬店、ステージ他
7月19日	大和川水辺の楽校体験教室	安全講習、水質調査、生物採集
11月22日(土)	大和川セミナー	関西大学堺キャンパスにて 講演、パネルディスカッション、「みんなの大和川」写真展作品展示ほか

いったのだった。

「砂州を使ったイベントをしたい。」という提案に対し、私たちはクッキーをほおぼりながら「宝探し、しっぽ取り、たらい流し」などたくさん案を出した。どの案も肯定的にとりあげてくれるものの、なかなか決定までは至らない。会議がはじまってから、すでに三時間が経過していた。やはりこの話しあい、会議ではない。話が盛り上がりれば盛り上がるほど、つつこんで、掘り下げて話しあう。厳密な会議のように時間の制限はなく、そこには都会とは思えないような、ゆったりとした時間が流れていた。「大和川…」は、運営スタッフそれぞれが何らかの楽しみや喜びをそこから得られるような成熟したグループだった。私たちは、「フルバリュー」という言葉を思い出さずにはいられなかった。

そして、翌2013年には、2期生15名が加わり総勢35名となった体験学習ゼミは、5月6日の水辺の楽校まつりに「ヨーヨー釣り」と「スーパーボール投げ」を出店、川での安全管理、子どもたちの魚と

りのリーダー役と、学部での学びを活かした活動で貢献した。これである程度のフォームが出来あがった「大和川…」は、この後も学生メンバーが会議に出席するかたちをとりながら、表1のように様々な事業に挑戦している。ゼミの担当教員である筆者が在外研究員として1年間米国へ出張している間は、灘英世准教授が代理として協議会に出席、現場では2期生が中心となって1年間の事業を完遂した。

IV. 堺エコロジー大学との連携

1. エコ大運営委員会への参加

移行期の「大和川…」の会議に集まった堺市役所の部局のひとつに環境局環境総務課(当時)があった。会議には、課長の米田太治氏が出席していた。そこで、たまたま筆者は米田氏の隣に座り、南方熊楠研究に基づく環境観などの自説を開陳する機会を得た。

堺市は、臨海部に巨大なコンビナートを有していたことなどから、従来から都市環境の改善には積極的であった。そして、そのような環境問題への熱心な取り組みが認められ、堺市は2009年に政府から

「環境モデル都市」に指定された。同年堺市は、「快適な暮らし」と「まちの賑い」が持続する低炭素都市「クールシティ・堺」の実現をめざす決意を宣言。さらに、「クールシティ・堺」を実現するための具体的な取り組みの一つとして、2010年、産学民官の連携による新たな環境教育・人材育成の事業「堺エコロジー大学」を設立した。環境総務課は、その堺エコロジー大学（以下「エコ大」）の事務局を務める部署であった。

米田氏は、新設された関西大学人間健康学部にもエコ大とかかわりを持ってそんな人材がいるということで、さっそく環境総務課のエコ大事務局を担当する辻尾匡彦氏と頼宮真柱氏を筆者の研究室に派遣、堺エコロジー大学運営委員への就任を要請した。2011年6月27日のことであった。こうして筆者はエコ大と関西大学の協力内容を開発していくことになる。

2. 「縁」の連鎖

エコ大の運営委員長を務める大阪府立大学の太塚耕司教授は、ファシリテーターに徹する会議運営で終始委員からの積極的な発言を引き出す。その委員のメンバーも理想的な多彩さで、堺を代表する大企業である(株)シマノから環境系のNPO法人、個人で活動しているエコロジストまで、完全にフラットな意見のやりとりができる雰囲気できていた。会議が終わった後は、みんなで堺東の商店街へ夕食に繰り出すのもエコ大の恒例行事であった。我が国では、往々にしてこのような「アフター」の場で会議本体よりも重要な議論が交わされるが、エコ大も例にもれずであった。以下に、具体的な会話の記録を引いておく。

【2011年7月20日

第1回運営委員会の後の堺東駅前某居酒屋】

安田 「東吉野村での子どもエコツアーって、楽しそうですね。」

辻尾 「そうなんです。でも、諸般の事情で中止になってしまっているんです。子どもたちが参加できるプログラムがまだそれほど多くないので、何とかしたいとは思っているんですが。」

安田 「これ、うちの学生たちとできるかもしれませんね。」

辻尾 「うわあ、それは素敵ですね。そういうのができると、本当にいいですね。」

安田 「うん、ちょっと考えていきましょうよ。来年度からは専門演習というゼミも始まりますし、うちは堺市さんとの連携を目玉にさせてもらっている学部です。何かお手伝いできそうな気がします。」

エコ大は、開設初年度の2010年から多数の講座を運営していたが、そのなかのひとつに、友好都市提携を結ぶ奈良県の東吉野村を訪ねる「東吉野村子どもエコツアー」があった。一方、筆者は、南方熊楠研究を通じて開拓してきた和歌山県田辺市との関係を利用して2008年度より全学科目として3泊4日の体験型授業「エコツーリズム演習」を実施していた。そこで得た知見を活用すれば、エコ大との連携で面白い企画ができるのではないかという直感があった。

【2012年1月12日

第4回運営委員会の後の堺東駅前某居酒屋】

安田 「辻尾さん、子どもエコツアー、熊野本宮でやりませんか。ぼくはいま本宮で授業をやらせてもらっているのですが、体験型の環境学習のコンテンツはたくさんあります。例えば、東吉野でやっておられた間伐もできますし、世界遺産熊野古道のトレッキングや、川での魚とり、カヌー、ラフティングから紙すきやこんにやくづくりまで、いろいろなことができますよ。何よりも、現地のみなさんのホスピタリティが素晴らしい。うちの学生にキャンプリーダーをやらせてもらえると、大学としてもありがたいです。」

辻尾 「えっ！堺市と旧本宮町は、以前、友好都市だったんですよ。ところが、2005年に本宮町が田辺市と合併したのを機に、堺市は友好都市の提携を解消してしまったんです。」

安田 「ほお、そんな歴史がありましたか。」

辻尾 「まだ続きがあるんです。」

安田 「といたしますと？」

辻尾 「いったんは解消してしまった関係ですが、市民レベルでの交流が続いていたことなどもあって、堺市役所のなかに、今度は合併後の田辺市全体との友好都市締結を進めようという機運が盛り上がってきたんです。それで、2008年頃から、さまざまな交流が活発化してきているんですよ。」

安田 「なんと！それは面白いじゃないですか。私たち関西大学も、微力ながらそのお手伝いをさせていただけると嬉しいです。」

辻尾 「これはもう何か、運命的なものすら感じます。さっそく具体化に向けて動きましょう。」

安田 「いいですね。関大と堺市の連携事業として、両者の連携プログラムに申請しましょう。あそこなら予算もつくし、田辺市にも入ってもらえれば、これ以上ないというくらいの社会連携事業になります。学生もモチベーションが上がると思いますよ。」

こうして、エコ大の講座のひとつとして関大の学生が堺市の子どもたちを熊野へキャンプに連れていく、という夢のような計画が実現に向けて動き出した。

3. エコツアー前史

このように話が進んだのには、前述のように「いま本宮で授業をやらせてもらっている」という前史があった。2006年の春、文学部総合人文学科に専修横断型の「テーマプロジェクト」と呼ばれる副専攻が設置され、筆者も「健康福祉文化と生活設計」というテーマプロジェクトでゼミを担当した。メンバーは男5名、女性5名の計10名で、その5名の女子学生がフィールドワークの一環として面白いツアーを見つけてきた。「山の神汗かきツアー」というそのツアーは、田辺市本宮町の町おこしグループ「こだま塾」によって運営されている女性限定のグリーンツーリズムのプログラムであった。なぜ女性限定かというと、熊野で山仕事をする人たちの間では、「山の神」は女性神だと信じられていることにちなんでいるという。

長らく田辺市が進める南方熊楠邸保存顕彰事業に携わってきた筆者は、南方熊楠顕彰会事務局の前川光弘氏（文学部1987年卒）を通して「汗かき…」の

事務局だった田辺市本宮行政局に依頼、5名の女子学生は無事ツアーに参加する運びとなった。そして学生たちはツアー関係者へのインタビューなどを重ねて卒業論文を執筆、その過程で筆者自身も多くの本宮の関係者らと関係を結ぶことができた。

高度経済成長期の密植皆伐という方針は、その後の安価な外材の流入と山村の過疎化によって広大な放置林を生んだ。本宮もその例外ではなく、否、最も大きな影響を受けた地域のひとつであった。しかし、熊野本宮の住民たちはいろいろな活性化策を試行錯誤した。そのうちのひとつが『山の神…』だった。ツアーのメインコンテンツである間伐体験は、森林管理のボランティアになっている。つまり、都会の人々に本宮へ来てもらうだけでなく、林業の手助けをしてもらおうというのである。ツアーの客は、熊野の自然や、山の暮らしを体験することができ、本宮の人々は山仕事の手伝いをしてもらえる。お互いにメリットが大きいこのプログラムは、当時すでに10年以上続いていた。この実績は関係者の創意と情熱と、そしてチームワークから成ったものであることがわかり、それは同様の問題を抱えた日本中の山村のなかでも稀有なものであった。参加した学生の卒業論文から一節を引いておく。

実際に参加してみると、森林組合の人々が木の伐り方を教えてくれるし、村のおばちゃんたちがこんやく作りを教えてくれる。熊野本宮の人々が総出で迎えてくれているような気がした。そして、それらの手配や段取りに走り回っているのは、本宮行政局の人たち、つまり市役所の職員さんだった。そう、このツアーは行政主導ではなく、市民の町おこし活動を行政がバックアップするという、理想的な仕組みで進められていたのだった。（久保2007）

そこで、筆者は「こだま塾」の代表で本宮森林組合長でもあった杉山栄一氏に、このツアープログラムをベースにした大学生向けのキャンプができないか打診してみた。杉山氏は、即座に「やりましょう。」と決断してくださり、そこからは一気に事業が進展、翌2008年度には全学共通科目（当時）の「スポーツ研究実習」の1クラスとして「エコツーリズム」と

いう名称で3泊4日の授業が開講された。ベースとなっている「汗かき…」と同様の間伐や植栽などの森林ボランティアに加えて、世界文化遺産に指定されている熊野古道中辺路ルートを約20km踏破するなど、自然の中で身体を酷使するという、ユニークな内容が多かった関西大学の体育授業のなかでも殊に異彩を放つものとなった。この授業は人間健康学部開設後も継続し、昨年度（2016年度）まで足かけ10年にわたって実施された。この間、現場は本宮出身の田辺市職員である鈴木徳久氏と安井健太氏を中心とした次の世代へと移行し、筆者らは改めて本宮という町の懐の深さを実感させられた。このようにして醸成された本宮の人々との信頼関係が、「子どもエコツアー」開催の土台となっていったのである。

4. 2012年度第1回熊野本宮子どもエコツアー

そして2012年、ゼミに集まってきた20名の学生たちがPAによるトレーニングや大和川水辺の楽校へのボランティア参加を通して力をつけている間、筆者とエコ大事務局（辻尾匡彦氏、頓宮真柱氏）、田辺市本宮行政局（鈴木徳久氏、安井健太氏）との会議が繰り返され、この年の夏に第1回の「熊野本宮

子どもエコツアー」が開催される運びとなった。この間の作業工程は下表のとおりである。

表にもあるとおり、作業の過程でこの事業は2市1大学の連携事業として一気に盛り上がりを見せ、堺市と田辺市の間にも力強い架け橋ができていった。なかでも、宿泊を伴う教育旅行ということで、旅行業の認定を受けた業者の介入が必須と判明した際に、田辺市が2005年の合併に伴い田辺市内の観光協会（田辺・龍神・大塔・中辺路町・熊野本宮）を構成団体として設立した、官民共同の観光プロモーション団体である田辺市熊野ツーリズムビューロー（以下熊野TBと表記）が旅行業を手掛けているということで、直ちに支援を依頼、熊野TBはこれを快諾し、8月5日の事前説明会に竹本昌人総務部長が出席してくれた。

こうした「水面下」での動きと並行して、学生たちは多くの時間をともに過ごし、期待以上の成長を遂げてくれていた。そして、現地での下見や事前説明会の準備等で本格的に事業に参画するようになり、8月5日のプレキャンプに子どもたちを迎えてからは、本番で提供するプログラムを練りに練っていった。ゼミのメンバーが顔を揃える以前から準備して

表2 2012年度熊野本宮子どもエコツアーの作業工程

日付	内容	付記
1月20日	エコ大事務局と打ち合わせ	安田研究室にて
1月21日	関大・堺市連携プログラムとしての企画書完成、提出	両者の地域連携事業として推進することが決定
4月19日	エコ大事務局、安田が田辺市役所を訪問、内容等についての打ち合わせ	本宮行政局に加えて田辺市企画課も参画、2市1大学の連携事業に
4月26日	エコ大事務局と打ち合わせ	安田研究室、プログラム内容について
6月13日	エコ大事務局と打ち合わせ	安田研究室、広報等について
6月21日	エコ大事務局、安田が田辺市役所を訪問、内容等についての打ち合わせ	田辺市熊野ツーリズムビューローが旅行業の範囲を担当
7月1日	堺市広報7月号に募集要項掲載	
7月10日	安田と学生3名で現地下見	本宮のフィールドを視察
7月12日	募集チラシ配布開始	市校長会にて承認、市内全小学校の5、6年生に漸次配布
7月27日	エコ大事務局と打ち合わせ	安田研究室、実施内容等について
8月3日	申し込み締め切り	21名の参加者
8月4日	事前説明会準備	堺キャンパス、深夜に及ぶ
8月5日	プレキャンプ（事前説明会）	堺キャンパス、学生によるアイスブレイキング実施
8月24日～26日	熊野本宮子どもエコツアー	クアハウス熊野本宮・バンガロー（田辺市本宮町渡瀬）にて

きた「学びの場」は、予想をはるかに上回る効果をあげていった。

表3 2012年度熊野本宮子どもエコツアープログラム

【活動プログラム】

※天候等の状況により変更することがあります。

8月24日(金) 7:30

堺市役所前・市民広場 集合 出発

- グループ分け、アイスブレイク(ゲーム) ●川遊び ●自炊 ●キャンプファイヤー … etc. (クアハウス熊野本宮・バンガロー泊)

8月25日(土)

- 林業体験 ●木工体験 ●八咫の祭り参加、打ち上げ花火 … etc. (クアハウス熊野本宮・バンガロー泊)

8月26日(日)

- めはりずし作り ●熊野古道歩き … etc. 19:00頃 堺市役所前・市民広場 帰着 解散

そして迎えたツアー本番、子どもたちの弾ける笑顔に、関係者一同それまでの苦労が報われる思いがした。すべてが初めてのことであり、しかも先輩のいない学部の新1期生ということで、至らないことも多々あったが、I章で述べたような「能力を高める」「評価される」といったフレームが無効化された空間を、学生たちと子どもたちは見事に現出して見せた。学生のレポートの一部を引いておく。

腹の底にドンドンと何かが響く。まるで地鳴りのような、奥熊野太鼓の勇壮なリズムが、本宮の盆地全体を揺り動かす。広場の真ん中で焚き続けられていた神輿の火の周りに、人の輪がではじめた。八咫の祭りのメインイベント、奥熊野太鼓&熊野八咫踊りの開演だ。

踊りは大きく分けて二種類、いずれも篝火の周囲を回りながら踊るもので、同じ旋律が延々と繰り返されるうちに、人々はトランス状態に入っていく。自分の身体と他者の身体、あるいは自身と周囲の空気や景色との境界が溶けていき、音とリズムだけが世界の全てになる。そこへ「やああああああ。」と掛け声が入る。私たちも、子どもたちも、まったく躊躇することなく、腹の底から咆哮した。

周りで見ていた方々も、だんだんじっとしていられなくなったのだろう。徐々に踊り手の数

が増えてきた。町の人たちはもちろん、大学生、子どもたち、そして観光客、大斎原にいた人すべてがひとつになっていった。

昨日、練習で途中から「しんどい、面倒くさい。」と言っていたタクマがしっかり踊れるか気がかりだったので時折ちらちら見ていたのだが、昨日とは全く違った満面の笑顔で最後まで踊っていた。また、途中でケンシンが「おなかが痛い。」と言ってきたので心配していたが、まわりのみんなが楽しそうに踊っているのでもその場から離れたくないようだった。少し踊っては歩いて、踊っては歩いてを繰り返しながらも、ケンシンは途中でリタイアすることなく、最後まで輪の中にいた。

約1時間、みんな汗まみれになりながら、ひたすら踊った。ものすごい運動量だったと思う。最後は、みんなでハイタッチ。子どもたちの顔は満足感に満ち溢れていた。私たち大学生もこんな経験は初めてだった。なにか大きな仕事をやり遂げた達成感とは全く違う。解放感という言葉の方が近いのかもしれない。まるで生まれ変わったかのような、なんともいえない清々しい感じだ。「人と人」「人と自然」「かかわり」「言語や知識では伝わらないもの」、これがそうなのか。いや、そもそもアタマで理解するものではないのか。

2泊3日の最後の夜の祭りが、今回のキャンプのすべてを象徴していた。誰も予想しなかったほどに踊りは盛り上がり、本宮のみなさんもかつての友好都市堺からの若々しい来客を心からの笑顔で迎えてくださったのであった。

無事にエコツアーを終えた1期生たちは、夏休み明けのゼミの時間を利用して、参加者と家族へのかんたんなアンケートを作成し、助言を求めてきた。驚いたのは、学生たちが考えたアンケートの方法で、20名の学生が20名の参加者の家庭にそれぞれ電話でアポイントをとって訪問し、直接話を聴くというものであった。労をいとわないこの思い切った作戦にはまったく頭が下がる思いであった。以下に主な回答を引いておく。

表4 2012年度熊野本宮子どもエコツアーアンケート内容（抜粋）

小学校の弁論大会にこのツアーでの林業体験のことを題材に使わせていただき、改めて環境保全に対して調べたりして、意識が高まりました。
1人での参加に不安はあったが沢山お友達ができ、普段接することのない大学生と交流がもてて、社交性や自信がついたように思います。
この思い出は、大人になっても心に残っていると思う。
自然環境への関心も深まり、いろんな意味で目を向ける幅が広がった。
先生でも親でもない大学生とのかかわりが良い刺激になった。
子どもが成長する上での糧となるに違いない。
内容のわりに金額が安い。
家族旅行で同じ場所へ行ってみました。すごく良かった。
アユから手紙がきてうれしかった。もっと連絡先を交換しとけばよかったなー。
お手伝いをよくしてくれるようになった。
長距離（駅まで30分の道のり）を文句いわずに歩くようになった。
妹の面倒見が良くなった。
いい意味で大人に気を使えるようになった。
気が長くなった。
点数をつけるなら99点。1点足りないのは、もっともっといたかったから。
今後の希望として、ツアー前・ツアー中・ツアー後と継続的なプロジェクトにして、課題設定やそれを取り組み続けるというスタイルになればうれしい。

とくに気づいたことは、どの家庭も親が熱心であり、学生たちに様々な話をしてくれたことで、次回からは家庭も含めての共同運営であるということを中心に留めていこうと話し合った。情熱といえば、エコ大、本宮町、熊野TB、いずれも関係者すべてが前向きで、柔軟で、迅速で、なによりも笑顔が絶えない素晴らしい雰囲気であった。大成功となったこの第1回熊野本宮子どもエコツアーは、すべての関係者が力を合わせて次のステップを踏み出すきっかけとなった。

5. 2013年度第2回熊野本宮子どもエコツアー

熊野本宮子どもエコツアーの成功は、参加した子どもたちや学生たちだけでなく、関わった大人たちを大いに勇気づけることになった。前述のように、2005年の田辺市との合併以前、本宮町は堺市と友好都市提携を結んでいた。エコツアーに関わったすべてのスタッフは無言のうちにこのことを意識していたが、予想以上の大成功によって、こうした活動の先に堺市と田辺市との友好都市提携という次のステップがあることが共有されるようになっていった。

学生たちも、このような社会的な活動のなかで自分たちが成長できている実感を持たせた者が多く、1期生として暗中模索のような就職活動に直面しながら

表5 2012年度熊野本宮子どもエコツアーの作業工程

日付	内容	付記
4月9日	エコ大事務局と安田、関大事務局とで打ち合わせ	今年は3泊4日に拡大する
4月24日	エコ大事務局、安田が田辺市役所を訪問、内容等についての打ち合わせ	観光振興課にて、振り返りと今年の計画、学生も参加
5月30日	エコ大事務局と安田で現地下見	皆地生きものふれあいの里を利用する
7月12日	エコ大事務局と打ち合わせ	市役所環境総務課、広報等について
8月3日	申し込み締め切り	38名の参加者
7月22日	エコ大事務局と打ち合わせ	市役所環境総務課、内容等について
8月2日	エコ大事務局、安田、学生3名で現地調査	皆地生きものふれあいの里で調理等の予行
8月4日	事前説明会準備	堺キャンパス、深夜に及ぶ
8月5日	プレキャンプ（事前説明会）	堺キャンパス、学生によるアイスブレイキング実施
8月28日	前日準備部隊本宮入り	皆地で受け入れ準備
8月29日～9月1日	熊野本宮子どもエコツアー	皆地生きものふれあいの里にて
9月22日	エコツアー振り返り会	堺キャンパスにて
11月9日	エコツアー反省会	居酒屋京料理 義経 堺店
11月10日	エコツアー事後報告会	関係者をまじえて学生からの報告会

らも、次年度のツアーのために熊野で数次の合宿を張り、新宮の火祭りを観に行くなど、彼ら彼女らなりの学びを進めていた。

学生たちは、2期生15名を迎えてさらに充実し、フルバリューを合言葉によきCゾーンをつくるためのチームビルディングに腐心していた。なかでも最終学年となる1期生たちは、どうしても昨年以上のチャレンジをしなければという意識を持っており、自分たちの主な役割である子どもたちとのプログラムづくりに熱を込めた。具体的には、前回の振り返りの際に筆者から伝えたいいくつかの「種明かし」のなかで「キャンプ生活でストレスなく楽しめるのは2泊3日程度、3泊目くらいからいろいろな摩擦が起こる。だから、初心者ばかりの我々が運営する今回のエコツアーは2泊に設定した」という話に、新4回生はこだわった。快適なキャンプで思い出づくりもよいが、あえて様々な摩擦や「しんどさ」が噴出する3泊にしてみんなでそれを乗り越えようではないかと、簡単ではない目標を設定することにした。

表6 2013年度熊野本宮子どもエコツアープログラム

【活動プログラム】

※天候等の状況により変更することがあります。

8月29日(木) 7:30 堺市役所市民広場 集合・出発
11:00 熊野本宮(皆地)着

- グループ分け、アイスブレイク(ゲーム) ●川遊び ●自炊… etc.
(※旧皆地小学校グラウンドにてキャンプ〈テント泊〉)

8月30日(金)

- 林業体験 ●木工体験 ●自炊 ●キャンプファイヤー… etc. (※)

8月31日(土)

- 熊野古道歩き ●八咫の火祭り参加、打ち上げ花火… etc. (※)

9月1日(日) 8:30 熊野本宮(皆地)出発
12:00頃 堺市役所市民広場 帰着・解散

また、より本格的なキャンプをということで、宿泊地を廃校になった小学校を利用した「皆地生きものふれあいの里」に変更し、テント泊にも挑戦することになった。当然、学生たちもこれまで以上のスキルアップが必要であるため、4月中にテント泊のキャンプを張ってトレーニングした。

入念に準備をしたかに見えた2013年度のエコツアーであったが、就職活動によるスケジュールの遅延

や、長らく行動をともにしてきたことで生じてきたメンバー間の軋轢など、想像以上の困難が立ちはだかったが、それでも笑顔を絶やさず、渾身の力で前進していく若者たちの姿に、関係者一同は大いに感心させられた。

そして迎えたツアー本番、台風が近づく不安定な天候の下で今回もいろいろな出来事があった。その一部を学生のレポートから引用しておく。

ある女の子とのエピソードが忘れられない。開会式のときのこと。ほとんどの子が顔を上げて話を聞いているなかで、私の班の一番前に座っている女の子はずっとうつむいたままだった。しんどいのかな?と思った。元気がないように見えたので「体調は大丈夫? しんどくない?」と聞いてみたが、やはり頷くだけだった。たくさん話しかけられるのは不快なのかなと思い、私はいったんその場から離れて少し様子をうかがうことにした。

バスでたまたまその子の隣の席になった。彼女はバスのなかでもずっと下を向いたままだった。そのうち、バスレクがはじまった。みんなのテンションは急上昇。同時に彼女だけはみるみるうちにテンションが下がっていった。なんと、両手で耳を押さえて、周りの声が聞こえないようふさぎこんでしまった。これが、私と彼女の最初のかかわりだった。

1日目、2日目とその子はほとんど笑顔を見ることがなかった。そして3日目の夜、八咫の火祭りに参加する予定だったが、祭りは雨の影響で順延となり、私たちは皆地小学校の体育館で八咫の踊りのみを楽しむことになった。本番直前に、その八咫の踊りをみんなで練習していたときのこと。練習がはじまって間もなく、私は彼女がいないことに気づいた。もしかしたら外に出ているかもしれないと思い、体育館を出てみると、彼女と3回生のリーダーのメグが座りこんでいた。よく見ると、彼女は泣いていた。メグに話を聴くと、踊りの練習をしているときに突然泣き出したのだという。どうやら彼女はにぎわっている場が嫌いなようだ。私は、メグをねぎらって体育館に戻ってもらい、彼女と二

人きりで話すことにした。

しかし、いまこのタイミングで話しかけても何も答えてくれないと思い、彼女が泣き止んで落ち着くまで待つことにした。だいたい落ち着いたところで、「あの場所にいるのが嫌やったん？」と聞いた。彼女は「うん」と頷いた。「ああいう、みんながわちゃわちゃした所にいるのが嫌やねんなあ？」と聞くと、彼女ははっきりと頷いた。「やっぱりそうだったのか。しんどかったんだな。」私自身はみんなとわいわい楽しむことが好きだから、彼女がなぜ体育館から逃げ出したのが全くわからなかったのだが、このとき初めて、彼女が自分とはまったく違う価値観を持っていることに気がついた。「フルバリューって何よ？」私は自問した。無理やり体育館に連れて戻るのだけは違うはずだ。「そうだ、待とう。」彼女が体育館に戻れるようになるまで、少し様子を見ることにした。

太鼓の音が聞こえてきた。身体が覚えているリズムだ。みんなが踊っているところを見てみたいという思いもあったので、私は勇気を振り絞って「体育館、ちょっとだけ覗いてみる？」と聞いてみた。すると彼女は、「うん」と頷いた。まさかの返事に私はびっくりした。うれしかった。

体育館の近くまで戻り、遠巻きになかの様子を覗いてみると、みんなは激しく盛り上がっていた。アリーナでは「やあああっ」という叫び声が反響を重ね、あのリズムと汗と筋肉が溶けあっていた。楽しそうだった。私たちはずっとその様子を見ていた。どれくらい時間がたっただろうか、すでに踊りは終わっていた。いままなら体育館のなかに入れるのではないかと思ひ、「体育館のなかに入ってみる？」と聞くと、彼女は「うん」と頷いた。ちょうどそのとき、アイスキャンディが配られていたので、二人で一緒に食べた。踊っていたわけでもないのに、冷たいアイスがたまらなくおいしかった。

…中略… 彼女に猫の話振ってみた。猫が大好きだということ、班の女の子たちから聞いていたのだ。「猫、好きやねんなあ？」と聞くと、「猫、めっちゃ好きやねん。」と、彼女はこ

れまで見せてくれたことのない笑顔で話しはじめた。このときの彼女は、ツアーの4日間のなかで一番きらきらしていた。話しかけても何も答えてくれなかったり、うつむいたままだったりした彼女が、別人かと思うくらいニコニコしながら話してくれた。私も自然とほほが緩み、ゆったりとした気分で彼女の言葉に耳を傾けた。

この日、たくさん泣いて、たくさん笑って、疲れ切ったからだろうか、彼女はいつもより早く眠りについた。私もこの日は気持ちよく眠りにつけた。これまで、彼女と私の心の距離は果てしなく遠いと感じていたけれど、3日目にしてようやく少し近づけたような気がした。

じつは、前回も今回も、参加者募集の条件は「堺市在住の小学校5・6年生」だけで、ハンディキャップの有無などは一切記載していなかった。前回は軽度の発達障害の児童が数名参加していたが、学生たちにはとくに知らせてさえいなかった。なぜならば、体験学習の参加者のプロフィールは多様であればあるほど学びが深まるからであり、フルバリューを標榜してのトレーニングに予断を持ち込むのは理屈に合わないことになるからである。このエコツアーの最大の長所は参加する子どもたちとほぼ同数の学生がサポートすることで、上の例のようにいざというときはマンツーマン以上の対応がとれるのである。学生にとっても、目標とするフルバリューとは何かを厳しく問われる場面に何度も向き合うことができる、貴重な機会であった。

学生たちのもう一つのチャレンジは、キャンプが終わったらすべて終了ではなく、9月と11月に2度の振り返りの会を設定したという点であった。これは体験学習のサイクルを強く意識したもので、学びを深めるためにはどうしても必要だとのことであった。前年度、各家庭を訪問してのアンケート調査から得た着想を活かし、11月は卒業研究報告会として参加者の家族にも参加していただくことにした。そして、学生たちはこの2年間の学びの集大成として、こうした活動をグループ研究として発表し、またその内容を『若者たちの熊野詣』というタイトルの書籍として残してくれた。以下に、研究報告会で得た家族からのコメントの一部を引いておく。

表7 2013年度熊野本宮子どもエコツアー保護者コメント (抜粋)

分業というキーワードが何度か出ていましたが、本番当日の誘導、受付、司会、発表、映像、記録などなどきちんと分担されていたこと、また、何度も段取りを確認しあったことがわかる進行であったことに感動しました。
単なる子どもたちとの夏休みの思い出に、と申し込んだのが縁で長くお世話になりました。他にもキャンプに参加したことがあります。中身を親にしっかり伝えていただくことが初めてで、また『行っておしまい』ではなく、『何度も体験を思い起こさせる』機会を与えていただき、とてもよかったです。次は下の子でお世話になることがあれば、と思います。また、年齢差を少し縮め、『中学生の部』でもあればぜひと思います。
去年も参加させていただき、同じところへ行くけれどまた行きたいかと聞くと、行きたいと言いました。リーダーの方たちが子どものことをよく見て楽しませてくれたからだと思います。親としては、子どもを楽しませていただき、本当によかったと思っています。ありがとうございます。学生のみなさんは、企画・運営とたいへんな苦勞をされたんだと思います。お疲れ様です。
私は、参加したお子さんの代理母として、本日参加させて頂きました。こちらのゼミの素晴らしさに大変感激しました。人として、社会で子どもがやがて大人になったときに、心の糧になるだろうと思います。4年生の方々の発表は、良いこと、きれいごとばかりではなく、ありのままの様子や、悩みが伝わり、心と心のふれあいの大切さを改めて感じました。

Ⅱ章で触れた「能力を高める」「評価される」ことから離脱することで何を学ぶのかということの、一定の方向性はこのように1期生たちの学びの記録から明らかであろう。それぞれが人間らしく生きていくためには、何が大切なのか。高度な知識の運用の前提として「いかに生きるか、という個々の哲学を鍛え合う」ような「学びの場」を経ておくことが必須なのではあるまいか。

さて、人間健康学部開設から完成年度までの4年間、1期生たちを先頭に新しい「学びの場」を創出すべく努力を重ね、これまで見てきたようなユニークな体験学習の「道場」のような仕組みができあがってきた。1期生が上梓した『若者たちの熊野参詣記』はその道標となるものであるが、それ以外にも一つ、関西大学と堺市と田辺市との連携という歩みの道標が刻まれることとなった。1期生が卒業していった約1ヶ月後の2014年5月3日、堺市と田辺市は友好都市提携を締結。これはゴールではなく、

新たな歩みのスタートであった。

V. まとめ

- ① 関大型の体験学習の目標の一つとして「フルバリュー」を掲げ、「能力を高めるのではない」「評価しない」という「有用性の原理」とは正反対の方向性を選択した。関大型体験学習では、実際の仕事や社会生活において「有用性の原理」に基づく高度な知識を運用する際の基盤を「体験」に置き、それらの質を高めることができる「学びの場」を地域社会との連携の場に求めるというフレームを構築しようとしている。逆に、良質な「体験」に裏打ちされない「高度な知識」は、「生きる力」や「社会人基礎力」に接続されることはない。
- ② 地域社会と大学との連携の現場においても体験学習の理念は活用できる。この4年間のチャレンジにおいては、学生や子どもたちだけでなく、学外の関係者もまた「ワクワク」して、「楽しい」と感じて、「前向き」に思考し、「迅速」に行動した。これは、PAの合言葉の一つである「Have fun」そのもので、楽しさからくるポジティブなエネルギーが現場の仕事を活性化させるのである。
- ③ 楽しさからくるポジティブな雰囲気は、仕事や人間関係を拡張する。「水辺の楽校」での出会いが都市間連携に貢献するような地域連携事業へと拡張していく展開の速さは、まさにそのことの証といえよう。同時に、そうしたポジティブな雰囲気は互いを認めあうフルバリューな「学びの場」を醸成していく。保護者のコメントに通底する雰囲気から読みとれるように、そうした「学びの場」自体もさらに伝播し拡張し、年齢や立場を超えて誰もが学べる場となっていく。
- ④ この4年間の展開において、体験学習ゼミは地域連携を目的としてきたのではなく、学生の「学びの場」を地域に求めてきた。いわば、こちらからお願いして事業運営に関らせていただいたのである。学生たちは常に学ばせていただいているという立場を忘れなかったし、それは事業そのものを自分たちの「学びの場」として主体的に受け

とめることができていたからである。そのような主体性はゼミというチームで体験学習を重ねるなかで形成されたものであり、大学側の地域連携を目的とした事業に何らトレーニングを受けていない学生が借り出されるという構造とは正反対といえる。2006年の教育基本法改正に「大学の社会貢献」が唱えられて以降、「新しい連携」と呼ばれる学生の動員のような地域連携事業が日本中で展開されてきたが、それらが「這い回る経験主義」の轍を踏んでいないかどうかを点検すべき時期に来ているのではないだろうか（中塚 2016）。

付記

本取組（又は本取組の一部）には、平成 25-27 年度関西大学教育研究高度化促進費において、課題「プロジェクトアドベンチャーを基盤にした体験教育型研修プログラム開発」として促進費を受けており、その成果を公表するものである。

【参考文献】

- Mike Brown (2008) Comfort Zone: Model or metaphor? *Australian Journal of Outdoor Education*, 12 (1), 3-12
- Kolb, D. A. (1984) *Experiential learning Experience as the source of learning and development* (Vol. 1)
- 久保夏美 (2007) 和歌山県田辺市におけるグリーンツーリズム、関西大学文学部総合人文学科卒業論文集
- 中原淳 (2013) 経験学習の理論的系譜と研究動向、*日本労働研究雑誌* 55 (10)、4-14
- 中塚 雅也、小田切 徳美 (2016) 大学地域連携の実態と課題、*農村計画学会誌* 35 (1)、6-11
- 高橋和子 (2005) 「からだ気づき」教育の構想と展望、*人体科学* 14 (1)、13-25
- 安田忠典 (2015) 身体運動文化研究の展望、*身体運動文化フォーラム最終号*、29-46

Collaborative projects in community as a further step
of experiential learning approach; a case report
of experiential learning program at the Faculty of Health
and Well-being, Kansai University between 2010–2013

Tadanori YASUDA

Abstract

The Faculty of Health and Well-being, Kansai University, was established in April 2010 in Sakai-city, and has focused on the experiential approach in education. Having a full-scale Project Adventure facility in the Sakai Campus, we have provided students with small group based experiential learning using the PA facility as a basic training for this experiential approach. Further, we have developed various collaboration projects with communities outside our campus as advanced step of this approach. Two successful cases in our neighborhood Sakai city as well as in Tanabe city in Wakayama prefecture are reported in this paper.

Keywords: Experiential learning, community cooperation, Project Adventure